

## 千葉則夫先生をお送りするの辞

中野 達司

千葉則夫先生は平成 24 年 3 月をもって、定年まで 5 年を残しながら、退職なさる。先生を慕う者としては、そんなに早くお辞めにならずとも、というのが率直な気持ちである。

千葉先生は昭和 54 年に本学教養部に英語の担当として赴任され、平成 2 年に国際関係学部にも、その創立メンバーとして移られている。国際関係学部ではアメリカ文化関係の講義、そしてゼミを担当されてきた。もともとはアメリカ文学の研究で成果を上げてこられた方であるが、国際関係学部に移籍されてからは、アメリカのエスニシティー関係の問題に研究領域を掘げられ、とりわけ同国の黒人リーダーや、彼らが公民権獲得のために果たした役割についての研究に取り組んでおられる。特にそのリーダーの一人、デュボイスを対象とする研究では本邦の草分けであり、ご著書『W. E. B. デュボイス一人種平等獲得のための闘い』を上梓なさっている。

先生はご自身が上記のような研究に勤しまれるに止まらず、アフリカ系などの、アメリカのエスニックな問題を勉強したい学生をゼミで指導してこられ、千葉ゼミに属した学生の立派な卒業論文はその結実である。千葉先生のことを「厳しい先生」と学生が評するのを耳にすることがあるが、それは表層のみを表したものである。厳しいこと、それ自体、教師に求められるものであろうが、千葉先生の厳しさは学生へのとりわけ深い愛情がベースにある血の通ったものであり、それは千葉ゼミで先生に指導を受けた学生なら誰でも知るに至るところであった。そのような学生は皆、先生の薫陶に応え、しっかりとした卒業論文を仕上げ、先生を敬慕しながら卒業していったのである。

先生の功績を思い起こせば、それは研究や教育上のことに止まるものではない。学部、大学の運営において果たされた功績もまた実に大きい。国

際関係学部は勿論のこと、亜細亜大学が誇るべき、単位認定米国留学制度、AUAPの発展に千葉先生は大いに貢献されている（発展と記したが、おそらくは発足にも貢献されている。しかし、筆者の就職前のことで知るところでないのが残念である）。それも縁の下の力持ち的に。先生は平成元年度に同行教員としてAUAP派遣先に行かれているが、その時に培われた現地スタッフとの個人的信頼関係は、その後のAUAPの発展、内容改善に大いに寄与しているのである。

千葉先生は学部創設の翌年から3年間、国際関係学部の教務主任をお務めになっている。その新生学部においては、教育内容は発展的解消をした経済学部国際関係学科の流れをくみ、教員は同学科の所属者のほか、教養部やアジア研究所よりの移籍者、それに新規採用者から成っていたが、旧国際関係学科出身者が多数であり、また概ね中心的役割を果たしていた。そのように旧国際関係学科が母体となっていた新学部の教務主任を、教養部から加わった千葉先生が担当されたのであるが、先生はよく学部長を助け、内外の問題を的確に処理されていた。しかも当時は、極めてやり手で周囲との衝突をものもしない、エネルギッシュな学長の下、亜大が動いていた時期である。その時期の教務主任をお務めになり、学部の安定化を成し遂げられたのは、たいへんな功績であると思っている。そしてその頃から、先生はお体が弱くなられたようでもあることが気になっている。

教務主任時代の先生のことを、私は執行部の隅にいて拝見していたが、責任感の強さ、また仕事の速さ、的確さ（これらは教務主任を退かれてからも遺憾なく発揮され、例えば自己点検報告書の執筆を担当されると、誰よりも早く、非の打ちどころなしというべきものを仕上げておられた）に感心したのみならず、常に筋を通そうとされていた姿勢に心打たれたものであった。個性派揃いの教員組織の中で、私心なく筋を通そうとして故なき誤解をされる場面も、一度ならずお見かけした。一方、若い同僚への心遣いを随所に感じたものであったが、それは愛情をもって学生を指導されていることに通じるものであろう。ご自分は苦勞されても、後に続く者には同じことを味わわ

せないように、との心遣いに、頭が下がるばかりであった。私的な物言いで恐縮だが、千葉先生は私にとって頼り甲斐のある、有難い兄貴分である。私は千葉先生の、あの竹を鉋で割ったようなお人柄に、この上ない魅力を感じている。

アメリカ通の教養人で、テニスをたしなまれ、ワインとコーヒーを愛される、欧米的香り漂う紳士ながら、同時に義理人情に厚く、曲がったことやけちくさいことが大嫌いな、古いタイプの、誇るべき日本人。これが私における千葉先生像である。先生はこよなくコーヒーを愛され、一方、タバコを徹底的に嫌われた。先生が教務主任の時に、国際関係学部の教授会は禁煙となった。あの煙が苦手だった私は千葉先生に大いに感謝したものだ。先生の研究室の前を通るとコーヒーの香りが漂ってきて、しばしの快感に浸ることがある（そして時々ご馳走にもなっている）。あの馨しい快感を味わえなくなるかと思うと寂しい。